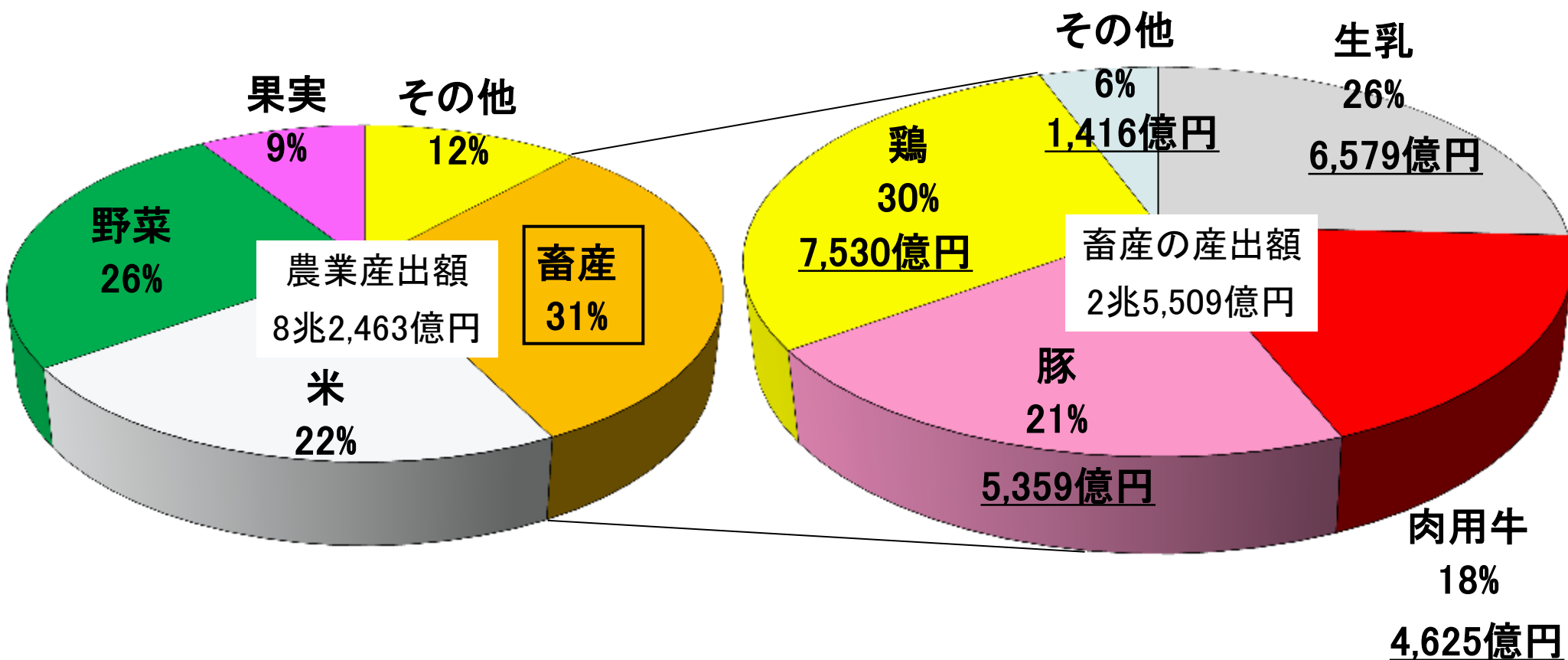


## 【参考資料】

〈基本的な事項〉

# 我が国農業における畜産の地位

- ・ 平成23年の農業産出額は8兆2,463億円。うち畜産は2兆5,509億円となっており、産出額の約3割を占める。
- ・ 畜産の産出額のうち、生乳が26%、肉用牛が18%、豚が21%、鶏が30%となっている。

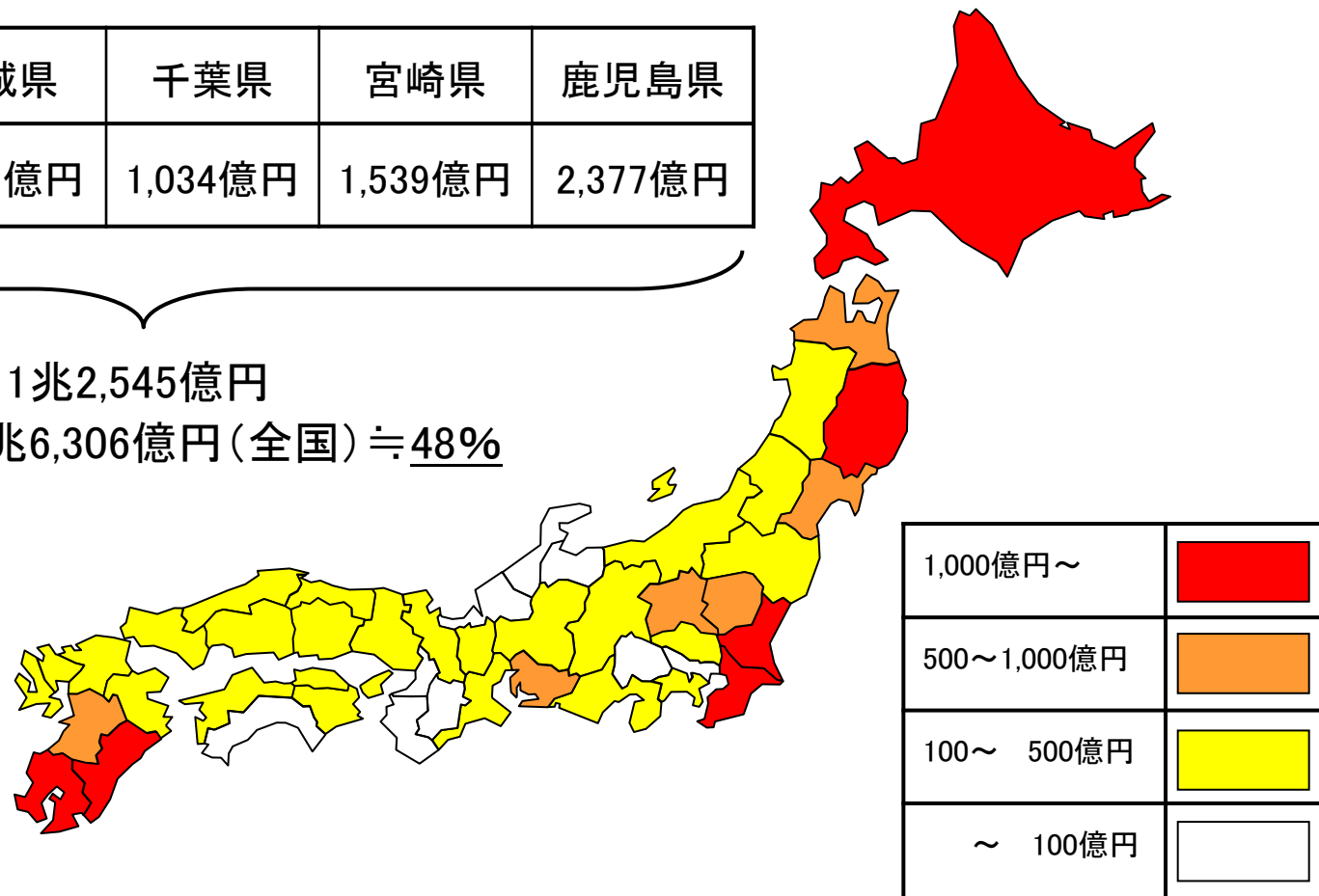


# 畜産の都道府県別産出額

- ・ 産出額を都道府県別に見ると、1,000億円以上が6道県（北海道、岩手県、茨城県、千葉県、宮崎県、鹿児島県）となっており、この6道県で全国の約5割を占める。

北海道	岩手県	茨城県	千葉県	宮崎県	鹿児島県
5,223億円	1,293億円	1,079億円	1,034億円	1,539億円	2,377億円

計 1兆2,545億円  
÷ 2兆6,306億円(全国) ≒ 48%



資料：農林水産省「平成23年農業産出額(都道府県別)」

注：都道府県別の数値は中間生産物(子豚等)が重複計上されているため、前ページの数値とは一致しない。

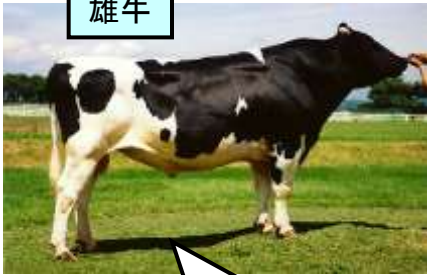
# 家畜・家きんの種類:乳用牛

- ・ 雌牛から、飲用牛乳やバター、チーズ、ヨーグルトなどの乳製品を生産するための「生乳(せいによう)」を搾乳。
- ・ 経産牛(子供を産んだことがある牛)1頭当たり年間約8,200kg(昭和40年約4,300kg)の生乳を生産、平均搾乳期間は360日程度。

注:生産物である生乳は、リットルなどではなくキログラムやトンで数える。

## ホルスタイン種

雄牛



典型的な乳用牛であり、我が国で飼養されている乳用牛の99%以上がホルスタイン種。その数は約140万頭。もちろん人間同様、子供を産まないと乳は出ない。

雌牛



「種雄牛(しゅゆうぎゆう)」と言い、雌に種付けするための精液を採取するための雄牛。精液販売の専門業者など、限られたところでしか飼養されていないため、めったに見る機会はない。

写真提供:(社)全国肉用牛振興基金協会

## ジャージー種



写真提供:(公社)中央畜産会

我が国ではホルスタイン種の次に頭数が多く、その数は約1万頭。ホルスタイン種に比べ、乳量は少ないが、乳脂率が高いという特徴がある。主に岡山県の蒜山高原などで飼養されている。

## ブラウンスイス種



写真提供:(公社)中央畜産会

我が国ではホルスタイン種、ジャージー種の次に頭数が多く、その数は1千頭強。ホルスタイン種に比べ、乳タンパク率が高くチーズ加工に適し、足腰が強く放牧に向いている。主に北海道、九州などで飼養されている。

# 家畜・家さんの種類:肉用牛

- ・肉用牛には3種の区分があり、それぞれ「肉専用種(和牛)」「乳用種(国産若牛)」「交雑種(F1)」と呼ばれている。
- ・「肉専用種」はそもそも牛肉を生産する目的で飼養されているもの。「乳用種」は酪農経営の副産物である雄牛を肉向けに肥育したもの。「交雑種」は乳用牛の雌に肉専用種の雄を掛け合わせ、肉質の向上を図ったもの。

## 肉専用種

### 和牛(4品種)

#### ○黒毛和種

我が国和牛の主要品種。肉質、特に脂肪交雑(いわゆる「サシ」)の点で非常に優れており、「霜降り高級牛肉」を生産。肉専用種の飼養頭数のうち、約95%がこの品種。



#### ○無角和種

被毛色は黒色で黒毛和種より黒味が強い。肉質の面では脂肪交雑や肉のきめなどが黒毛和種より劣る。



#### ○日本短角種

脂肪交雑はやや劣るが、体格が良く、放牧適性が高く粗飼料で効率的に赤身肉を生産。岩手県が主産県。



#### ○褐毛和種

肉質の点では黒毛和種に次ぐ。耐暑性に優れ、粗飼料利用性が高い。熊本県が主産県。



写真:(社)全国肉用牛振興基金協会HPより

この他、外国種(アンガス、ヘレフォードなど)も

## 乳用種(国産若牛)

#### ○ホルスタイン種(♂)

酪農経営の副産物である雄牛を去勢(きよせい)し、肥育する。肉質の点で輸入牛肉と競合。



この他「ジャージー種」なども

※「乳用種」「交雑種」の初生牛(ヌレ子:子供の牛)は酪農経営で生産される。

## 交雑種(F1)

#### ○黒毛和種(♂)×ホルスタイン種(♀)

乳用種の雌牛に肉専用種の雄牛を交配し、肉質の向上を図ったもの。

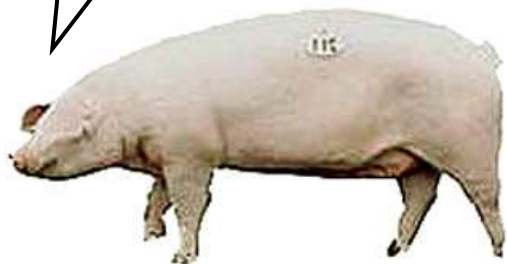


写真提供:(社)全国肉用牛振興基金協会  
乳用種は(公社)中央畜産会

# 家畜・家さんの種類：豚

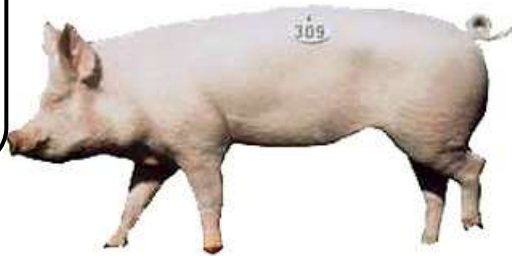
- ・ 養豚は主として、異なる品種を掛け合わせることによってそれぞれの両親や祖父母が持つ特徴を活かして、肉質、発育性、多産性などを向上させ、経済効率を高めながら、豚肉生産が行われている(三元交配(さんげんこうはい)など)。
- ・ また、純粋種としても生産され、我が国では「黒豚(バークシャー種)」が有名。

デンマーク原産。  
背脂肪が薄く赤肉率も高く、  
発育も極めて早いのが特徴。



ランドレース種

大ヨークシャー種



英国原産。  
赤肉率が高く、加工品の原料として高い評価を得ている。

米国原産。  
顔は長めで、顔面はわずかにしゃくれ、色は褐色。主要な雄系品種として飼養頭数も多い。



デュロック種

バークシャー種



英国原産。  
発育性(増体)は劣るが、肉質(きめ細かさ・柔らかさ)が良いのが特徴で、「黒豚」と呼ばれている。鹿児島が主産県。

# 家畜・家さんの種類：鶏

・ 鶏には、主として、卵を生産する「卵用種」と、ブロイラーなど肉用として飼養される「肉用種」がある。

※ 「卵肉兼用種」もある。

## 卵用種



○白色レグホン  
代表的な卵用種。  
産卵数は供用初年  
度で250～290と多  
産。

1人・1年当たり鶏卵消費量  
S35年 116個  
↓  
H元年 311個  
↓  
H24年 320個

## 肉用種



○白色プリマス  
ロック  
この雌と「白色  
コーニッシュ」とい  
う品種の雄を掛  
け合わせたもの  
が、ブロイラーの  
主流。

○比内地鶏  
写真は比内鶏。  
この雄と「ロードア  
일랜드レッド」とい  
う品種の雌を掛け  
合わせて「比内地  
鶏」という銘柄で食  
用に供されている。



# 飼養動向：乳用牛

- ・飼養戸数は、毎年、年率4%程度の減少傾向で推移しており、25年は3.5%の減少。飼養頭数は、減少傾向で推移。
- ・一戸当たり経産牛飼養頭数は増加傾向で推移。
- ・経産牛一頭当たり乳量は毎年増加傾向で推移。22～23年度にかけては22年の猛暑の影響等により減少したが、24年度は再び増加に転じた。

区分 / 年		17	18	19	20	21	22	23	24	25
乳用牛飼養戸数(千戸)		28 (▲3.8)	27 (▲4.0)	25 (▲4.5)	24 (▲3.9)	23 (▲5.3)	22 (▲5.2)	21 (▲4.1)	20 (▲4.3)	19 (▲3.5)
	うち成畜50頭以上層(千戸)	8	8	8	8	8	7	7	7	7
	戸数シェア(%)	(29.2)	(29.3)	(30.4)	(31.4)	(34.1)	(33.7)	(34.1)	(34.9)	(35.9)
乳用牛飼養頭数(千頭)		1,655 (▲2.1)	1,636 (▲1.1)	1,592 (▲2.7)	1,533 (▲3.7)	1,500 (▲2.2)	1,484 (▲1.1)	1,467 (▲1.1)	1,449 (▲1.2)	1,423 (▲1.8)
	うち成畜50頭以上層(千頭)	991	980	971	961	986	983	987	980	944
	頭数シェア(%)	(60.8)	(60.8)	(61.9)	(63.8)	(66.7)	(67.3)	(68.5)	(68.9)	(67.8)
	うち 経産牛頭数	1,055	1,046	1,011	998	985	964	933	943	923
一戸当たり 経産牛頭数(頭)	全国	38.1	39.3	39.8	40.9	42.6	44.0	44.4	46.9	47.6
	北海道	55.3	57.2	56.8	59.5	62.4	63.6	63.9	68.1	68.1
	都府県	30.2	30.8	31.5	31.7	32.5	33.2	33.6	34.9	35.9
経産牛一頭当たり 乳量(kg)	全国	7,894	7,867	7,988	8,011	8,088	8,047	8,034	8154	—
	北海道	7,931	7,849	8,032	8,046	8,027	8,046	7,988	8017	—

資料：農林水産省「畜産統計」、「牛乳乳製品統計」

注：各年とも2月1日現在の数値である。ただし、経産牛一頭当たり乳量は年度の数値であり、24年は速報値である。



# 飼養動向：肉用牛

- ・ 飼養戸数は、小規模層を中心に減少傾向で推移し、25年は6.0%の減少。
- ・ 飼養頭数は、18年以降、緩やかに増加傾向であったが、22年以降減少に転じ、25年は3.0%減少。
- ・ 飼養戸数、飼養頭数とも減少しているものの、肥育牛を中心に一戸当たり飼養頭数は増加傾向。

## ○ 肉用牛飼養戸数・頭数の推移

区 分 / 年		16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
肉用牛	戸数(千戸)	93.9	89.6	85.6	82.3	80.4	77.3	74.4	69.6	65.2	61.3
	(対前年増減率)	(▲4.3)	(▲4.6)	(▲4.5)	(▲3.9)	(▲2.3)	(▲3.9)	(▲3.8)	(▲6.5)	(▲6.3)	(▲6.0)
	頭数(千頭)	2,788	2,747	2,755	2,806	2,890	2,923	2,892	2,763	2,723	2,642
	(対前年増減率)	(▲0.6)	(▲1.5)	( 0.3)	( 1.9)	( 3.0)	( 1.1)	(▲1.1)	(▲4.5)	(▲1.4)	(▲3.0)
	1戸当たり(頭)	29.7	30.7	32.2	34.1	35.9	37.8	38.9	39.7	41.8	43.1
うち	戸数(千戸)	80.0	76.2	73.4	71.1	69.7	66.6	63.9	59.1	56.1	53.0
子取用	頭数(千頭)	628	623	622	636	667	681	684	668	642	618
めす牛	1戸当たり(頭)	7.9	8.2	8.5	8.9	9.6	10.2	10.7	11.3	11.4	11.7
うち	戸数(千戸)	18.6	20.4	17.7	16.7	16.5	16.8	15.9	15.2	14.3	13.5
肥育牛	頭数(千頭)	1,798	1,765	1,768	1,801	1,837	1,843	1,812	1,718	1,702	1,663
	1戸当たり(頭)	96.7	86.5	99.9	107.9	111.3	109.7	114.0	113.0	119.0	123.2

資料：農林水産省「畜産統計」（各年2月1日現在）

注1：子取用めす牛と肥育牛を重複して飼養している場合もあることから、両者の飼養戸数は肉用牛飼養戸数とは一致しない。

注2：肥育牛は、肉用種の肥育用牛と、乳用種の和としている。

# 飼養動向：豚

- ・ 飼養戸数は、小規模飼養者層を中心に年率1割を超える割合で減少してきたが、近年、減少率は鈍化し、25年は4.6%減。
- ・ 飼養頭数は、15年はBSE発生による豚肉需要の増加に支えられ、大規模飼養者層における規模拡大等によりやや増加したが、16年以降は増減を繰り返しており、23年以降はやや減少。
- ・ 一戸当たり飼養頭数は着実に増加。

## ○豚飼養戸数・頭数の推移

(各年2月1日現在)

区 分 / 年	16	18	19	20	21	23	24	25
飼養戸数(千戸)	8.9 (▲5.8)	7.8 (▲12.2)	7.6 (▲3.2)	7.2 (▲4.2)	6.9 (▲4.7)	6.0 (▲12.8)	5.8 (▲2.8)	5.6 (▲4.6)
うち肥育豚千頭以上層(千戸)	2.0	2.0	2.0	2.1	2.1	2.0	2.0	1.9
戸数シェア(%)	(27.2)	(30.7)	(31.0)	(33.7)	(34.2)	(37.0)	(38.7)	(38.5)
飼養頭数(千頭)	9,724 (0.0)	9,620 (▲1.1)	9,759 (1.4)	9,745 (▲0.1)	9,899 (1.6)	9,768 (▲1.3)	9,735 (▲0.3)	9,685 (▲0.5)
うち子取用雌豚(千頭)	918 (▲1.3)	907 (▲1.1)	915 (0.9)	910 (▲0.5)	937 (2.9)	902 (▲3.7)	900 (▲0.2)	900 (0.0)
うち肥育豚千頭以上層(千頭)	6,874	7,232	7,379	7,500	7,833	8,022	7,974	8,007
頭数シェア(%)	(74.7)	(79.0)	(79.7)	(80.8)	(82.3)	(84.8)	(84.9)	(85.5)
一戸当たり平均 飼養頭数(頭)	1,095.0	1,233.3	1,292.6	1,347.9	1,436.7	1,625.3	1,667.0	1738.8
一戸当たり平均 子取用雌豚頭数(頭)	118.1	133.8	139.5	145.6	158.0	176.5	183.7	194.7

資料：農林水産省「畜産統計」

注：17年及び22年は世界農林業センサスの調査年であるため比較できるデータがない。

また、18年及び23年の( )内の数値は、それぞれ16年、21年との比較である。

# 飼養動向：鶏（採卵鶏）

- ・ 飼養戸数は、近年、小規模飼養者層を中心に年率4～6%の割合で減少。
- ・ 成鶏めす飼養羽数は、平成11年以降減少傾向で推移した後、19年は増加したが、20年以降、再び減少。一戸当たり飼養羽数は、着実に増加。

## ○ 採卵鶏飼養戸数・羽数の推移

（各年2月1日現在）

区 分 / 年	16	18	19	20	21	23	24	25
飼養戸数	4,090 (▲5.8)	3,600 (▲12.0)	3,460 (▲3.9)	3,300 (▲4.6)	3,110 (▲5.8)	2,930 (▲5.8)	2,810 (▲4.1)	2,650 (▲5.7)
うち成鶏めす10万羽以上層 戸数シェア(%)	348 ( 9.3)	352 ( 10.7)	365 ( 11.6)	356 ( 11.9)	350 ( 12.4)	336 ( 12.5)	327 ( 12.8)	328 ( 13.5)
成鶏めす飼養羽数(千羽)	137,216 (▲0.1)	136,894 (▲0.2)	142,765 ( 4.3)	142,523 (▲0.2)	139,910 (▲1.8)	137,352 (▲1.8)	135,477 (▲1.4)	133,085 (▲1.8)
うち10万羽以上層(千羽) 羽数シェア(%)	74,359 ( 54.5)	82,260 ( 60.1)	88,453 ( 62.0)	91,543 ( 64.3)	91,001 ( 65.2)	90,083 (65.7)	90,314 (66.8)	91,556 (68.8)
一戸当たり平均 成鶏めす飼養羽数(羽)	33.5	38.0	41.3	43.2	45.0	46.9	48.2	50.2

資料：農林水産省「畜産統計」

注1：種鶏のみの飼養者を除く。

注2：数値は成鶏めす羽数1,000羽未満の飼養者を除く数値である。

注3：平成17年、22年は世界農林業センサスの調査年であるため比較できるデータがない。

また、18年および23年の( )内の数値は、それぞれ16年、21年との比較である。

## 飼養動向：鶏（ブロイラー）

- ・ 25年度は、統計が変わったことで、以前までと比較はできないものの、傾向として、飼養戸数は、近年、小規模飼養者層を中心に減少で推移。飼養羽数は、増減を繰り返し推移。
- ・ 一戸当たり飼養羽数は着実に増加し、特に大規模層（年間出荷羽数50万羽以上）のシェアは拡大傾向。

区 分 / 年	15	16	17	18	19	20	21	25
飼養戸数(戸)	2,839	2,778	2,652	2,590	2,583	2,456	2,392	2,420
(対前年増減率)	(▲2.1)	(▲2.1)	(▲4.5)	(▲2.3)	(▲0.3)	(▲4.9)	(▲2.6)	(—)
飼養羽数(千羽)	103,729	104,950	102,277	103,687	105,287	102,987	107,141	131,624
(対前年増減率)	(▲1.8)	(1.2)	(▲2.5)	(1.4)	(1.5)	(▲2.2)	(4.0)	(—)
出荷戸数(戸)	3,323	3,240	3,120	3,065	2,991	2,925	—	2,440
うち50万羽以上層(戸)	150	157	170	185	194	203	—	225
戸数シェア(%)	(4.5)	(4.8)	(5.4)	(6.0)	(6.5)	(6.9)	—	(9.2)
出荷羽数(千羽)	595,283	589,957	606,898	621,820	622,834	629,766	—	649,778
うち50万羽以上層(千羽)	175,759	179,296	195,529	211,470	217,617	225,436	—	270,778
羽数シェア(%)	(29.5)	(30.4)	(32.2)	(34.0)	(34.9)	(35.8)	—	(41.7)
一戸当たり平均 飼養羽数(千羽)	36.5	37.8	38.6	40.0	40.8	41.9	44.8	54.4
一戸当たり平均 出荷羽数(千羽)	179.1	182.1	194.5	202.9	208.2	215.3	—	266.3

資料：農林水産省「畜産物流通統計」、「畜産統計」

注1：飼養戸数及び羽数は各年2月1日

2：21年までは畜産物流通統計、25年は畜産統計における調査となっており、21年以前の数値とは接続しない。

3：25年の数値は、年間出荷羽数3,000羽未満の飼養者を除く数値である。